

ドイツ新国会議事堂 1999年 ノーマン・フォスター

国の有様を示す議場空間

20世紀は、諸民族が解放されたが、戦争が絶えぬ世紀でもあった。前半には核兵器が開発、使用され、大戦後、東西冷戦が長く続いた。この激動の時代に翻弄され、数奇なまでにその国の歴史を体現する国会議事堂がある。年代順のこの連載最後の建築として、1999年、旧議事堂を抜本的に改修完成したドイツの国会議事堂を採り上げよう。

再統一した'90年10月、国会議場は激論の末、戦後、議場として使用されずにきた旧議事堂の場所に決め、'92年に国際指名コンペが行われ、香港上海銀行を手掛けた高度技術駆使の第一人者、ノーマン・フォスターが選ばれた。

場所はベルリンの中心部、旧西側でブランデンブルグ門と指呼の位置。旧議事堂はパウロ・バレット設計で混合様式、1894年に完成した。中央部にガラス屋根を載せ、直下に議場を置いた左右対称の日の字型プランで3階建て。1919年の革命を経て共和国になるが、右翼テロの横行で議事堂を使わずワイマールにて憲法を制定した。進歩的なその憲法下でナチスが台頭。ナチスは'33年に議事堂に放火して共産党員に罪を着せて弾圧し、ヒトラーは全権委任法を可決させて独裁政治に突入し、大戦を起こす。大戦中は要塞として使われるも'45年春、ソ連軍によってベルリンは陥落し、屋上に駆け上ったソ連兵によって赤旗が掲げられ、その写真は世界に伝播しドイツ敗北の象徴となる。戦後、国会はボンに移し、簡略な修復後、博物館に使われた。

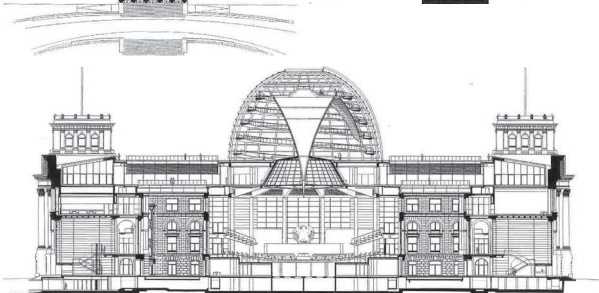
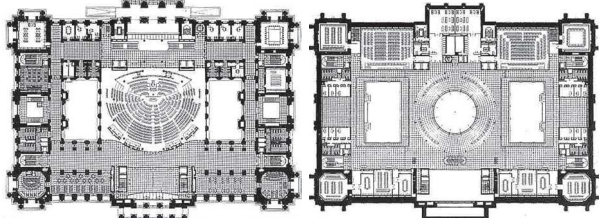
外壁を残し、内部は各階、旧プランの輪郭を踏襲するも構造ぐるみ新たに造り、権威主義と無縁に現代的に設え、議場の上部に新しいガラスのドームを載せた。議員と市民は分け隔てなく中央の同一口から出入りする。

1階は議場の他に議会事務局や党派の会議室、2階は議員の事務室、3階は政党事務局やプレスロビー。外壁の内側にはソ連兵の落書きを残し、歴史を伝えるほか、要所に現代アートが据えられて明るい。訪問者は専用昇降機で屋上テラスに行ける。カフェもあり、何より、ガラスのドームの内側に設けられた螺旋状の斜路を巡って頂部の展望台に登れることだ。眺望の良いそこは会議場の真上で、国民こそ主権者であると明快に表現しているようで、ユーモラスでもある。デモクラシー国家の議場の有様を遺憾なく示している。

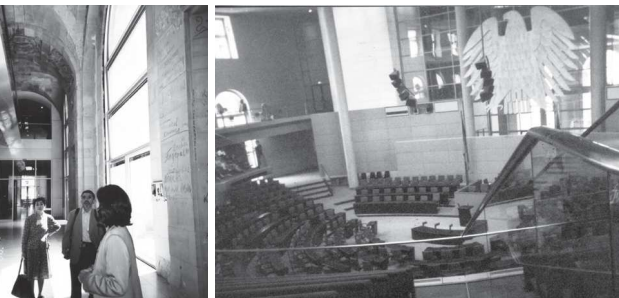
ドームの中心にはラッパ状の反射鏡が建ち、議場への光を調整し、かつ筒を利用して自然換気を行っている。空調温熱源に再生可能なバイオ燃料を使い、排熱で発電し、蓄熱には深い地下水脈を活用、CO₂排出を抑える工夫を重ね、地球環境に配慮した。この面でも国の有様を象徴するように、持続可能性を重視した議場空間を実現したのだ。



西側正面外観 屋上に新たにガラスのドームを載せ替えた。



左上 1階平面図 右上 3階平面図 下 断面図



左上 屋上ガラスドーム 右上 ドームの内部。中央に筒状の反射鏡
左下 1階の外壁にソ連兵の落書きを残す 右下 議場内部